



# 暁のオリエンス



衣玖矢曇

## 東から昇る

---

美しい朝日が、布団の海に横たわる、彼女を差した。

彼女は、柔らかな意識の中、神に出会った。

「あなたは、誰？」

『体系を体系たらしめる存在』

「そう・・・」彼女は無意識に囚われつつあった。

『お前に与えよう』その存在は、力強く言った。

・・・。

彼女は起きた。

変な夢だが目覚めとしては悪くない。

「今日の朝御飯は、ご飯かな？パンかな？」毎朝、朝食を当てるのが、彼女の密かな楽しみとなっている。

！？。瞬間、目に痛みが走る。

「っ痛！ なに？ えっ・・・」彼女の目は不思議なものを写していた。

視界の中に、分数が二つ、浮かんでいた。

$\frac{1}{2}$  と  $\frac{2}{5}$  視界の中の分数は、今もふわふわと浮かんでいる。

「ええええ ええええええ おかあさん！！」

一階に降りると、ホカホカのご飯が待っていた。

「あっ ご飯なんだ・・・ ってそうじゃなくて！！ お母さん 目の中に！！！」彼女は完全にパニックになっていた。

「あれ？」なんと目の中の分数は消えていた。

不思議なことがあるものだと、彼女はそのまま学校に登校した。

授業は、2時間目、数学だ。

彼女は数学が苦手な先生に当てられないよう願うのが彼女のルーチンワークである。

「ああ、当てられたらどうしよう・・・」

まただ！ 目に痛みが走る。

目をこすり、瞼を開ける。

視界に数字の"1"が浮いていた。

「えええええ」思わず、大きな声が出る。

クラス中の視線が集中する。

「おお、〇〇！！元気がいいな！ じゃ、この問題解いてみろ」先生の太い声は明らかに彼女に向けられたものだった。

「いや、あの、先生、目に数字が・・・」自分でも何を言っているかわからない。

そうこうしているうちに、"1"は消えてしまった。

彼女は四苦八苦ししながら、解答を黒板に書く。

解答は、-7だ！！

間違いない！

！！ 「痛！」 また、目に痛みが走る。

視界の中の数字は"0"を表していた。

とりあえず、席に戻る。

「おい、〇〇、答え違うぞ。 」先生が解説を始める。

目の中の数字は消えていた。

## 西から差し込む

---

暖かな西日が、授業中にもかかわらず、彼女を眠りに誘う。

ただ、彼女は眠気と闘う気などさらさらなく、如何にしてバレないように寝るかその一点に脳のプロセッシングは使われた。

よし、今日は、ペンを持った手だけ動かし寝ることにしよう。

彼女だけではなく、他の生徒も使うベーシックな居眠り法である。

この方法で、ばれる確率はかなり低いはず。

！？ また、目に痛みが走る。

人が寝ようとしているときに、なんてタイミングだ。

彼女は自分のことを棚に上げ、朝から襲われている謎の痛みを批判した。

視界に映る分数は、 $\frac{4}{5}$ と出ている。

ああ、もう！下手したら数字が出るこの不思議な眼病に一生悩まされるのか。

最悪だ。

っていうか $\frac{4}{5}$ って何だよ！

ああ、もう・・・。

「〇〇さん！」

いや、もしかするとこれは分数ではないのでは？

さっきの数学の時間は1と0だったし。

「〇〇さん！！」

「へっ？」彼女は顔を上げる。

そこには、顔を真っ赤にした鬼、もとい、古文の先生がいた。

「さっきから何をぶつぶつ言っているの！」

どうやら、いつの間にか口から思考が漏れ出していたらしい。

気づくと、クラス中の視線を集めていた。

先ほどの数学の授業の件もあり、彼女のことを笑う者はおらず、皆哀れな者を見るような表情であった。

ああ、最悪だ。

「すみません、先生、目が痛いので、保健室行っていいですか？」彼女は本当のことを言った。

「行ってらっしゃい。」先生は鼻息荒く言った。

保健室に入る。

この保健室独特のアルコールっぽい匂いが鼻を刺激する。

当然ながら保健の先生がいた。

「あらどうしたの？」

「あの、目に数字が出てくるんです。」自分で言っていて悲しくなった。

「・・・」先生が硬直している。

「いや、目が痛いので、あはは」慌てて言い直す。

「それじゃ、目を見せてくれる？」先生が言う。

「はい、」先生に目を診てもらう。

「別に充血もしてないわね。」先生は淡々と言う。

「あの、先生、目にゴミとか浮かんでないですか？」彼女は恐る恐る言う。

「無いね、それ飛蚊症じゃない？まあ、とりあえず、今は寝ておきなさい。」先生はとりあえず寝ろという安易な結論に達したようだった。

「はい」彼女も安易な結論に同意した。

飛蚊症？そんなちやちなものじゃないということは彼女自身よくわかっていた。

ベッドに横になる。

寝るべき場所になると眠れなかった。

机なら寝れるのに・・・。

彼女は、自分の体を呪った。

ガガガガ・・・

「「午後からの県北部の天気をお伝えします。18時以降ところにより小雨となるでしょう。降水確率は、30%です。」」

先生がラジオをつけたらしい。

病人がいるのになんて自由なんだ。

雨になるかもしれないのか。

降水確率、なんて不思議な言葉何だろう、そう思う。

現実には、降るか降らないかの二択しかないはずなのに。

そう、1と0しか起こりえないのに、それを確率なんていう3/10という1と0の間で表現する。

確かに今の技術では、完全に天気を予測することはできないのだろうけど。

・・・・・・・・！！！！

彼女の脳のニューラルネットワークにナトリウムイオンの電気信号が流れる。

今朝からの目に映る不思議な数字。

その意味がわかった気がした。

そう、この瞳に映る数字は、“確率”なのだ。

## 南から望む

---

南から柔らかな風がゆっくりと集団移動していた。

「はあ、はあ、・・・」そして、彼女は走っていた。

風が首、肩、腋、スカートの間をすれ違って行った。

住宅街を走る、交差点を走る、坂を走る。

走る、走る、走る。

瞳の中に浮かぶ数字は、 $1/2$ であった。

家を出た時には、 $1/5$ であった。

確率が上がっている。

このまま、もうちょっと頑張って走り続ければ、遅刻は免れそうだ。

彼女は、7:30に間に合う確率をその瞳に問うたのだ。

「何としても、朝課外に間に合わせるんだ！、ウェッホ、ゲホ。」走りながらしゃべると当然ながら咽（むせ）る。

（っていうか、なんで、朝課外なんてものがあるんだ！どうせ、毎日朝課外があるのだ、授業の始まり時間を7:30にしてくれればいいのに！！朝課外なんて括りにしてるから余計に苦痛に感じる！！！）

彼女は、走りながら、自慢のそもそも論を思考展開した。

遠くに学校が見え始めた。

後は、直進あるのみ、彼女はラストスパートを試みた。

いつもは、この辺りでクラスの友達と合流するのだが、遅刻中なので、当然皆、いなかった。

突然、体中に衝撃が走った。

地面に体全体で倒れこむ。

「あうう・・・」変なオノマトペが出てしまう。

四肢からの現状報告が、脳に集まる。

どうやら、左側面に何かが、ぶつかったらしい。

さてさて、何がぶつかったのだろうか。

彼女は見上げる。

そこには、人が、いや、青年が、いや、うちの男子高校生が、いや、同じクラスの涼水くんがいた。

そして、涼水くんとは、彼女が片思いしている相手でもある。

「あれ？、〇〇さん！ごめんね、大丈夫？」涼水くんが右手を差し出してくれる。

「ああ、あの、大丈夫っていうか、いや、あの、その、どうして涼水くんが、いやそうじゃなくて・・・」彼女は言葉を発したが、それは意味をなしてはいなかった。

「あはは、とりあえず、起きようか。」涼水くんが彼女を起こしてくれた。

「ああ、今日はなんていい日なんだろう♪」彼女の思考は漏れ出していた。

・・・！！

「ってそうじゃなくて！、涼水くん、遅刻するよ！！」彼女は涼水くんに話す。

「あはは、〇〇さんは本当に面白いね。大丈夫だよ、今日から試験期間だから、朝課外は休みだよ。」涼水くんは優しく微笑み彼女に語りかける。

(・・・・・・・・、そうだったあー！！)

開いた口がなかなか閉じなかった。

やっぱり、〇〇さんて面白いなあ、一緒に登校しながら涼水はしみじみと思う。

彼女は、思考と振る舞いが同期していることを自覚していない。

そして、それが、周りの笑いを誘っていることも知らない。

(まっ！でも朝、憧れの涼水くんと一緒に登校することになったのだ。結果往来どころかお釣りが来るぐらいだ(?)) 彼女は持ち前の明るさで、気分は完全に切り替わっていた。

学校までの一時、彼女は涼水くんと楽しい時間を過ごした。

朝課外が無いのであれば、みんなだらだらとゆっくりと登校してくる。

つまり、私が、涼水くんと楽しい時間を過ごしていることを知っているのは、おそらくいないだろう。

妬まれるのは、ごめんだ。

それを考え、クラスに入るときは、自分から先に入り、そのような素振りを感じさせないように気をつけた。

楽しい一時も過ぎ、自分の席に座る。

「しかし、朝は失敗したなあ。瞳の確率は、問に対して正確に答えるということか・・・」

今朝の質問は7：30に間に合う確率であった。そう、そこに朝課外があるかどうかなど考慮されてはいなかった。

「まあ、でも、涼水くんと一緒に登校できたし、えへへ。」おそらく、この先一週間は、今朝の話題で頭の中が飽和するだろう。

そうだ！あの確率を瞳に聞こう！

彼女は聞きたい疑問を瞳に問うた。

『涼水くんが私のことを好きな確率！もちろん、恋愛感情として♪』

！？

っ痛、目に痛みが走る。

瞳の中に数字が浮かび始める。

えっえっ

ええええええええええええええええええええええええええええええええええ

瞳に数字が浮かんでいた。

数字？確率？いや、数字の羅列と読んだ方が良いのかもしれない。

1 / 78621458125547455875587

浮かんだ確率、それはほぼ0であった。

数字がじんわりと滲み出した。

それは、彼女の涙であった。

暖かな滲みは溢れ、きめ細かな、淡桃の頬に一筋の軌跡を描いた。



## 北を肯定する

---

北の窓壁に反射した初夏の日差しが彼女の体温をじわりじわりと上昇させた。

涼水くんが私のことを好きな確率を問うてから今日で一週間。

メンタル的なウェットダメージは、少なくなってきた。

しかし、あのほぼ0の数字には、衝撃を受けたと言わざるを得ない。

彼女の右前方、50m先のベンチに、彼は座って昼食を食べていた。

正直、あれから一週間、彼に近づくことさえ、嫌になっていた。

ただ、だからと言って、彼から逃げ出すことはさらに嫌だった。

「えええい。」彼女は、涼水くんの座るベンチに一步踏み出した。

ふと気づく、瞳の中の数字が変化した。

「えっ」

2/4566855541

明らかに、確率が上がった。

ほぼ0は0だが、確実に変化していた。

さらに、一步進める。

1/63334442

また、確率が上がった。

一步一步進めるごとに確率は上がる。

ベンチに座る涼水くんの前まで、彼女は進んだ。

「あ、あのお！！」

いつもは、ベラベラとしゃべる彼女だが、今は違う。

勇気を振り絞り、声をうわずらせながら、彼に彼女は声を掛けた。

瞳の中の確率は、さらに上がる。

「午後の数Ⅱの宿題見せて！！」

「えっ！？」

「え、（何いってんだ私はああああああ！！）」

瞳の中の数字は、上がり続けた。

-----

東から入った適度な湿り気を含んだ風は、

西向きのリビングの大きな引き窓を突き抜け、庭の大きな木を揺らし、

南から差し込む柔らかくも強い日差しは、酸素をオゾンへ変化させ、北にくすぶる、有機系浮遊物に付着し、その結合エネルギーを断ち切り、より安定な状態へと導いた。

陽が沈む頃に、瞳の大きな、期待に満ちた表情の少女は、似して似なる女性の元へ歩み寄り、皆々が問う当然の疑問を、期待してぶつけた。

「ねえ！ねえ！お父さんとお母さんってどうやって出会ったの？」

「えっ お母さんは学校に行く時にお父さんとぶつかったの。それからスキになったの。」優しい表情の女性は、子にそう話した。

「えー、違うだろ、お父さんが昼休み休んでた時に、突然近づいてきて、いきなり宿題見せてくれて言ったのが初めての出会いでしょ。」彼女の夫は、ソファに座りながら、母娘の会話に割って入る。

「ちょっと、お父さんは黙ってて！」小さい娘は、父親に向かいプンと腹を立てて言った。

「ねえ、お母さん、お父さんのことスキ？ずっとずっとスキ？ずーと？」 娘は問うた。

ここには、三人しかいない。

一人は、自我が生まれ、自身の自我を学びつつあった。

一人は、労働の癒しに母娘の会話を聞いていた。

一人は、確率という名の運命を理解し、近くて遠い、理想を手に入れた。

あの人の瞳には、今も1という数字が浮かび続ける。

【オワリ】

著：衣玖矢 曇 （いくや くもり）